

いじろのとも

第一巻

六月号

いじまんね

日常的欲望の多くが 満たされている時	だがそうなると 自分の弱さに
人は自分の弱さに 気付かないで	気付かないから 他人の弱さも
ごうまんになる	分からない

いま日本人の多くが
日常的安定の中で
はかなくも幸福感を得て
ごうまんに
なっている

世界中から
経済的に
搾取をしても
それを搾取とは
思わない

障害の重い子の
一瞬を刻んだ生に
日常的に接していても
自分も同じ弱さをもっているとは
思わない

他人の弱さを感じられない
それだけならまだよい
無意識のうちに
その弱さを
追求さえする

ごうまんになることの
何と恐いことよ
人間として一番大切な
「人の心を感じる心」が
失われていくのだから

幸せになりたい人は

五、心身を清らかに保つこと

「幸福になる生き方十ヶ条」 第五条 「墮落」を戒めて心身を清らかに保つこと。

今月号は第五条について解説いたします。

先月号で述べましたように人間は「物質」と「生命」と「精神」の統合の上に成り立っています。したがって、御承知の通り、人間の中にも動物的な側面があります。ですから動物がするように苦しいことは避け、快いことを追求しようとする傾向を持っています。この第五条で問題としている「墮落」は、こうした傾向を無反省に追い求めている状態のことを言うのだと思つて頂きたいと思つています。

ところで、今日繁栄を誇っている物質・科学文明は、実はこの少しでも楽で、快適な生活をしようという人間の基本的な欲望の上に築かれてきたわけです。ですから、現代の多くの人たちは、そうした欲望の追求、たとえば、食欲や性欲（物質的・動物的欲望）の追求にこそ最も大きな満足をおぼえるようになって来ています。

はたして、こんな事でいいのでしょうか。私は、こんな事をして物質的・動物的満足を得ても、決して幸せはやって来ないと思うのです。

今の日本では、いや経済的に発展している国すべてについて共通して言えることですが、人間にとって最も大切な、いわば人間の条件ともいえる、こころ（精神）がだんだんと失われて来ているように思われます。そしてそれとともに、こころが物やお金に換えられてしまつていくように思えるのです。たとえば、家族とか家庭のあり方をとつても、その事が反映しています。昔は必ず、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、それに子供たちが一つの家に同居して暮らしていました。ところが今では夫婦と子供だけの家が多くなつてきています。都会ではさらに、父と子供だけとか母と子供だけという家庭が徐々に増えています。離婚したり、未婚で子供を産んだりした結果こうなつて来ているわけです。

家庭がもつ機能や役割には色々なものがありますが、それがどんどん分化し企業化してきたわけです。江戸時代ですと多くの人が、家で教育を受けました。それは主に家を継ぐための職業教育であつたわけですが、それが明治以後は教育は学校が分担するようになりました。今ではしつづまで学校やけいこごとの塾にまかせようとする親まで出てきています。

また農家の場合食べるものも、殆ど自給自足でしたが、今では国際分業までが進んで自給出来る割合はきわめて小

さくなつてきています。さらに外食産業の進出は家庭での料理、おふくろの味を家庭から締め出そうとしています。

こうした傾向は食べ物だけではなく、洗濯や掃除にも現れています。お金さえ出せば、そうしたものも他人にまかせられるようになってきています。外でお金をかせいできて、そのお金で人を雇って、家庭でしていたことを代わりにやってもらうわけです。

しつけや料理、洗濯、掃除は、父親や母親の愛情（こころ）の表現として考えられていましたが、今はそれがもの（お金）にとつて代わって来ているわけです。こころの物質化とも呼んだらよいと思うのです。

こうなつてきますと、互いに気をつかいながら夫婦一緒に暮らす事すらすらとましく感じられる事になります。ましてや、多くの人にとって、嫁と姑が同じ屋根の下で暮らすことなど考えられもしないわけです。子供は自分のペットとして可愛いし、たとえそうでなくても放り出すわけにもいきませんので、父母のどちらかが育てるといふ事になつて来ているわけです。しかも出来るだけ長い時間、保育所などに預けて育てます。

こうして、自分が追求するものは社会の中での栄達や出世、財産の蓄積であったりするので。そして貯めたお金を使って、よい家に住み、うまいものを食べ、きれいな服

を着、よい車にのる。そしていつか、どこかで好きな人に出会えば、自由にかつ刹那的にセックスを楽しむ。しかし、それをとがめる人は家庭の中には一人もいない。自由に人生を楽しみ、謳歌する。こう書いてくると、少しおおげさだと思われるかも知れませんが、社会の趨勢はこう動いているように思われます。人のこころがだんだんと刹那的、もの的になつてき来ていると言わねばなりません。

こうなりますと前述のように人生で追求するものは動物的欲望だけになってきます。心はますます失われ人が心で関わりあわないで物（お金）で関わりあおうとすることになります。でもこの方向を進んだ時、待ち受けているものは人の墮落しかありません。人間は心（精神）をもっているからこそ人間なのにそれを失っていくわけです。動物的墮落へと進む以外に道はないわけです。仏の道からどんどん遠ざかっているように思われます。

ではこれを取り戻す道はどこにあるのでしょうか。皆さんはどう考えでしょう。私はまずこうなつてきた原因として、やはり人が宗教や哲学を無くしてしまったことを挙げたいのです。

ではここで宗教とはなにかということですが、それは心とは何かを見定めることだということにしておきます。外にあるものではなく自分の内なる心を追求して、徹底的に

見つめていくところに宗教は存在します。今現代人が追い求めているものとはまったく逆の方向です。墮落を戒め、心と体を清らかに保って自分の生きていく意味を徹底的に追求していくわけです。そうした時、そこに見えてくるものは、物を追い求めていることに幸せがあるのではなく、心のあり方にこそ幸せがあるということなのです。誰でもが、何でもが、絶対なるもの（仏様）によってこの世に送られ、許されて平等に存在していることを知ることができるのです。その時仏様の現れであるあらゆるもの、あらゆる人に、感謝の気持ちを持ち、仏さまの慈悲の心を持つことができます。こうなりますと先月号で述べました「人の心を感じる心」が自分の心に宿ってきて、人と心を通じた関わりあいの大切さが実感されてきます。

老人は養老院や老人ホームに預け、子供は保育所や学校に任せて、自分は自分の道を追求し、お金を貯めてみても決して幸せはやってきません。たとえ自らの生き方に多少の制限は受けようとも、年寄りや子供の世話を自らの家庭で、自らの手で、自らを捧げて行う時、心が豊かになり、人と人のつながりが不動のものとなります。

今の今からヨーガをし、勤行式のお勤めをしましょう。自然と心と体が清められ、仏を宿した清らかな心が現れ出てきます。

自作詩選

人間の業の深さ

多くの人は

行おこなってはならないことを行おこない

(不殺生 不偷盜 不邪淫)

言いってはならないことを言い

(不妄語 不綺語 不悪口 不両舌)

思おもってはならないことを思おも

(不慳貪 不瞋恚 不邪見)
思おもわなければならないことを思おもわない

人の業の何と深いことよ

ヨーガをしよう

そして業から救われよう

火生三昧

(かしょうざんまい)

一心に慈救呪と般若心経を
唱えて祈る

年齢

護摩火のあとの

火渡り

この人たちの心の中の幸せ
が

さわやかなさわやかな
朝の風よ

歳を取るにつれ
不動な人格へと
高まっていく人

熱い火の中を

多くの人が渡った

もつともつと不動になりま
すようにと

いま私の心に軽やかさとす
がすがしさを

歳を取るにつれ

足を引きずりながら

火の中に倒れそうになりな
がら

五月の風

もたらしてくれている五月
の風よ

我儘な子供へと
退化していく人

が

新緑の若葉を揺らしながら
風が吹き抜けていく

お前は何処から吹いてきて

にんげんだけが

ホトケさまのお蔭を信じて

熱い火の中を渡る

私の頬を撫でながら
風が吹き抜けていく

何処へ吹いていくのか

ひらいてしまう

五月の薫りを漂わせながら
風が吹き抜けていく

いまを精一杯に
吹いている五月の風よ

一日一歩でよい

私はこんなにも多くの人が

信仰をもっていることに驚

きながら

完成に向かつて

きながら

歩いて行きたい

真言宗在家勤行式（ ）

十善戒
弟子某甲 盡未來際 不殺生 不偷盜 不邪淫 不妄語
不綺語 不惡口 不兩舌 不慳貪 不瞋恚 不邪見
弟子某甲 未來際の尽くるまで、殺生せず、偷盜せず、
邪淫せず、妄語せず、綺語せず、悪口せず、両舌せず、
慳貪せず、瞋恚せず、邪見せず。）

善い行いをするための十の戒め

ホトケさまのみ教えを聞く身となった私は、いつまでも決して生き物を殺しません。盗みをいたしません。男女の道を乱しません。うそ偽りを言いません。ふざけたたわごとを言いません。人の悪口を言いません。仲たがいをさせるようなことを言いません。物惜しみしたり貪ったりいたしません。怒り憎むことをいたしません。人間存在の根本理法について間違った見解をもちません。

この十善戒は、世俗の人が守るべき戒めとして、お経の中に説かれています。もちろん弘法大師さまも大変重要視されました。

いま私が考えてみますと、この十の戒めを完全に守ることとは私にはなかなかできにくいことです。例えば不殺生について見ましても、自分が直接手を下さなくても魚や肉を食べれば間接的には生き物の命を奪ったことになっている

わけです。また八エヤカ、ゴキブリのような害虫を殺すことをためらう人は日本には殆どいません。さらに野菜なら命を奪ったことにはならないのかと言う問題もあります。

ですから、この戒めも誰でもが相対的にしか守れないということになります。私が思いますのに、この教えは人間が生きていく事がそうした尊い生命の犠牲の上になりたっている事を知り、それらの命にいつも感謝をする事が大切だと言っているのではないのでしょうか。ですから犠牲を必要最小限にして、無益な殺生をしてはならないことを教えているように思えます。またこの中には、ガンジーやキング牧師の唱えた無暴力も含まれていると考えられます。

この他にも、私には不悪口と不瞋恚もなかなか守れないものです。大学の先生の多くが今墮落しています。怠けとごますりの横行は目を覆うばかりです。早晚大学はつづれるのではないかとさえ思えます。私はこうした墮落に、情け無さと同時に腹立たしさを感じています。あっ、私は大学の同僚に腹を立て、悪口を言ってしまった。でも自分のためでは無いことだけが救いです。修行を続けよう。

十三仏の紹介（番外一）

「金剛界曼陀羅」こんごうかいまんだら

前回の胎藏界曼陀羅に続いてご紹介いたします。この曼陀羅は「金剛頂経」に基づいて作られています。金剛はダイヤモンドのことですが、ここでは私達の悟りの心がダイヤモンドのように硬いことを表しています。したがってこの曼陀羅は、人の悟りの心がきわめて硬いことを図に示したものと言えます。

図の下半分をご覧下さい（省略しています）。（勝又俊教 編著「お経真言宗」講談社刊より引用。）この曼陀羅は、九つの部分から成っていますので、九会（くえ）曼陀羅とも言われます。真ん中の羯磨会（成身会）じょうしんえとも言う）がこの曼陀羅の基本形で、厳密にはこれだけでもよいわけです。それを取り出したのが、図の上半分です。この図の中心になるのもちろん、真ん中の大日如来です。それを四人の仏が取り囲んでいます。それぞれ阿（あしゆく）、宝生（ほうしよう）、阿弥陀（あみだ）、不空成就（ふくこうじょうじゆ）仏です。

またこれらの五人の仏をそれぞれ四人の菩薩が取り囲んでいます。この図の水天、風天、地天、火天を除くと、残りは全て菩薩です。それも金剛何々菩薩という名前が付け

られています。例えば一番外側の左上ですと、金剛華菩薩となります。天を除いて三十七尊から成り立っています。

このほか、三昧耶会、微細会、供養会は羯磨会の仏（大曼陀羅）を描きなをしたもので、対応しています。それぞれ、剣とか鈴とかで（三昧耶曼陀羅）、梵字で（法曼陀羅）、仏の働きで（羯磨曼陀羅）、描きなおしたものです。

この他の五つは、付け足されものです。四印会は今までの代表を、一印会は大日如来だけを、描いています。

（金剛界曼陀羅の図 2枚「省略」）

後記

一、毎日一つの詩を作るという目標を、元旦から今日まで何とか達成してきました。読んでもらって、「へた」だと言った人もありましたが、私の人柄が良く出ていて、後に残るものがあると言ってくれた方もありました。詩は全くのしるうとですので、「うまい」などは夢にも思いませんが、私の心が通じてほしいという思いはあります。私は教育者ですし、僧侶ですので、仏様の教えられたことを弘めなければなりません。まだまだ私自身が仏様の心ほど遠い身ですので、多くの修行を積んで行かなければなりません。私の心を通して少しでも仏様の心が伝えられればと思つています。良い詩が書けないのは、私の修行の足りなさと思ひ、精進していきたくと思ひます。

二、予定を変更して五月十三日曜日に柴燈護摩が、我が観音寺で焚かれました。多くの方がおまいりしてくださいました。そして火渡りにも、多くの方が参加されました。ありがとうございました。人間に尽きない煩惱をあの火で焼き払い、身を清められた事と思ひます。きっと大きなご利益が授かつてくるのではないのでしょうか。

三、今月号でもう半年になりました。楽しみにしていると申つてくださるかたもあり、私も書きたいことが山ほどありますので、まだまだ続けていけそうです。ご支援下さい。

月刊 こころのとも 第一巻 六月号	平成二年六月十五日 〒714 笠岡市走出一三六の一 真言宗醍醐派 走出山 観音寺 中塚 善成 <small>（善次郎）</small> 八六五六 五 七二三
----------------------------	---

本誌希望の方は、返信封筒（切手）をお送り下さい。

発達・教育・人生相談 受付

筆者は十数年来、障害児をもつ親御さんや登校拒否児・情緒障害児・学業不振児などをもつ親御さんの相談にのって来ました。ご遠慮なく、電話・はがき・手紙などで事前に、または当日お申し込み下さい。

霊能相談・ご祈祷 受付

いつも壇上でご祈祷して下さっている宮本龍憲師は霊能力の高い方です。お悩みのある方お申し出下さい。